



壽里順平教授

独立独歩の人―壽里順平先生

奥　島　孝　康

壽里先生がご定年を迎えられたという。往時を想い、友人の一人としてまことに寂寥の感にたえない。願わくば、いつまでもお元気でこれからの人生を楽しまれんことを。

とはいえ、先生は自他ともに認める「漂泊の人」である。外国の旅行先の路地裏あたりで、「やあ、奥島さん」と突然声をかけられそうな気がする。ぜひそんな機会があることを楽しみにして、この一文を草する。

先生との出会いは、助手の最後の年（一九六八年）のころではないかと思う。壽里先生が専任講師として着任された年である。当時はいわゆる早大第二次闘争と呼ばれる学生紛争の真最中であり、翌年（一九六九年）専任講師となった私は、その対策を協議する教員会があまりにも多いため、いつしか壽里先生を含む専任講師仲間と酒を酌み交わしながら、学生問題をあれこれ話し合うようになったが、その居酒屋の酒席で誰からもなく、上州の法師温泉へ出かけようという話しが持ち上がった。メンバーは、澤村灌、有賀健、高山旭、奥山康治、松原和夫の諸氏に加え、壽

里さんと私の七人であった。残雪の残る法師温泉の雪見酒の会は、いつものことだが、有賀さんと高山さんの激論(?)を肴に実に楽しい夜となった。

その夜、こんなに楽しいのなら、今後同じメンバーで会合を続けようではないかということになり、生まれたのが「法師会」であった。いうまでもなく、法学部講師の会と法師温泉を重ね合わせたのネーミングである。その後に出かけた私のゼミ生の両親が経営する金沢の湯涌温泉での大宴会、帰りに途中下車した豪雪の高田(現上越市)で、有賀さんの奥さんの里のお寺さんで甘エビを肴に痛飲した夜などの楽しさがいまもなお記憶に残っている。

旅行以外にも、壽里さんや有賀さんのご自宅におしかけ、ご馳走になって大騒ぎをしたことも、若き日の楽しい思い出として記憶の底にしっかり焼きついている。なにしろお互いに若かったうえに、オープンで気のおけない人柄の仲間たちばかりなので、公表をはばかられる話題も多く、とりわけ壽里さんの提供する話題には、一同腹をかかえて笑いこぼしたものである。普段はあのも静かな壽里さんが、法師会では人が変わったように陽気になり、饒舌になる。ほんとうにいい仲間だったとつくづく思うこのごろである。

ところで、周知のごとく、壽里さんはスペイン語の達人である。NHKのスペイン語講座でもあの豊富な海外体験を生かし、大好評を博したことが物語るように、いわゆる「生きたスペイン語」を教えることのできる当時としては異色の教師であった。壽里さんはその経歴自体も異色である。政経学部を卒業し、法学研究科修士課程で国際法を専攻したのに、なにを思ったのか、数年間南米へ放浪の旅に出た。帰国後、その旅の途中で収集したラテンアメリカの生きたスペイン語を整理して辞書を出版したり、現地社会の実情をあれこれ紹介したりして、いつのまにか壽里さんはラテンアメリカ社会についてのウォーキング・ディクショナリーとなったのである。

その壽里さんがどこでどう間違ったのか、わが法学部のスペイン語担当教員となり、その経歴にもかかわらず、もっとも生真面目な語学教師の一人となった。わがゼミの卒業生の話すところによると、壽里さんの授業を受けたら南米の現地で即通用したとベタ褒めである。ところが、他方、真面目に出席しない学生にとっては、相当厳しい先生に映ったことも事実のようである。二年間でスペイン語を身につけさせようと努力し、そのためには一切妥協しない教師としての使命感ともいえる信念とその姿勢は、いかにも意地張りの壽里さんらしい生き方だと思えた。

こんなこともあった。私が教務部長であったころ、英独仏を除く第二外国語の充実強化をはかるために、「少数民族懇談会」を設け、各学部から委員を出してもらい、半年ほど議論をしたことがある。私は学内の「少数民族語学」という意味でこの名称を使ったのだが、壽里さんはスペイン語はこの地上の四〇%近い地域で使用されているのに、どうして「少数民族学」なのかと、最後までこだわっておられた。これまた壽里さんらしいこだわりで、私はあわてふためき、大いに反省させられたものである。そして、壽里さんのスペイン文化への情熱に触発された私は、この懇談会を契機に、文学部に対してスペイン語とイタリア語を中心とする「南欧文学科」ないしは「南欧文化専攻」の新設を提案し、検討してもらったが、残念ながら賛同を得ることができなかった。

壽里さんは、在職中、いつも「生きたスペイン語」の調査研究のため、黙々とフィールドワークに励まれ、その成果をもとに教材づくりに取り組み、熱心に学生を教育されてきた。しかし、既存のアカデミズムからは距離をおいて独自の道を歩まれてきたため、必ずしも多くの理解者がいたとは思われない。まさしく、「独立独歩の人」の宿命といってよい。けれども、壽里さんの大学人としての歩みと見識は、早稲田のスペイン語教育に一つの優れた歴史をしっかりと刻み込まれたと私は確信をしている。

い。
この機会に往時を偲び、改めて長年の友情に深謝し、これからの先生のご健勝とご多幸を心から祈念申し上げます。

壽里順平教授 履歴および研究業績

履 歴

一九三六年（昭和十一年）八月一三日生

学 歴

一九四三年四月 東京都渋谷区大和田小学校入学

一九四六年四月 東京都世田谷区京西小学校編入

一九四九年三月 同校卒業

一九四九年四月 私立世田谷学園中等部入学

一九五二年三月 同校卒業

一九五五年四月 早稲田大学高等学院入学

一九五五年三月 同校卒業

一九五五年四月 早稲田大学第一政治経済学部政治学科入学

一九五九年三月 同大学同学部同学科卒業

一九五九年四月 早稲田大学大学院法学研究科修士課程（公法学専攻）入学

一九六四年三月 同大学院法学研科修士課程修了（下記遠征隊事故による在学延長）

その他の経歴

一九六一年五月 早稲田大学エクアドル・アンデス遠征隊の調整員としてエクアドル国立中央大学の夏季国際講座に出席、同国

の地域調査に従事し同年一二月に帰国

一九六一年一〇月 エクアドル共和国大統領ベラスコ・イバラ博士より日・エ文化交流に寄与したとする表彰状を授与される

一九六二年一月 運輸省国家試験（通訳案内業資格試験）スペイン語に合格

一九六四年四月 エクアドル国立人類学・地理学研究所へ留学、アルフレド・コスタレス、アントニオ・サンティアゴ博士の指

導の下で同国民族地誌を学んだ後、翌年よりチリおよびアルゼンチン南部パタゴニア氷陸地方の探査

一九六五年二月 南米大陸より帰国

職歴

一九六六年四月～六八年三月 早稲田大学語学教育研究所講座講師（スペイン語）

一九六六年七月 早稲田大学教務部非常勤講師（夏期講義）

一九六六年五月～六八年三月 早稲田大学社会科学研究所の研究員となる

一九六七年四月 早稲田大学法学部乙種非常勤講師（専任待遇）となる

一九六八年四月 同学部専任講師となる

一九七二年四月 同学部助教授となる

- 一九七六年四月 同学部教授となる（現在に到る）
- （非常勤、兼任およびその他の教育経歴）
- 一九七一年四月～七四年 創価大学文学部（スペイン語）
- 一九七二年四月～七六年 立教大学ラテンアメリカ研究所（ラテンアメリカ論）
- 一九七四年四月～七九年三月 NHK TV「スペイン語講座」講師
- 一九七五年四月～同年七月 外務省研修所（中級および上級外務公務員対象原書講読）
- 一九八一年四月～八六年三月 立教大学ラテンアメリカ研究所（ラテンアメリカ論、ラテンアメリカのスペイン語）
- 一九八一年一〇月～八二年三月 同ラジオ「スペイン語講座」講師（応用編）
- 一九八二年一〇月～八三年三月 同ラジオ「スペイン語講座」講師（応用編）
- 一九九〇年一〇月～九一年三月 同ラジオ「スペイン語講座」講師（応用編）
- 一九八七年～一九九〇年 ラジオジャパン、中南米向け「やさしい日本語」講師
- 一九八九年～二〇〇二年 国際協力総合研修所専門家研修管理室「派遣国講義」講師

研究業績

著書

- 『現代スペイン語熟語集』（一九六八年二月、イタリヤ書房）
- 『基礎スペイン語文法』（一九六九年七月、研数書院、現同書名で東洋書店より発行）
- 『入門スペイン語』（一九七一年四月、白水社）
- 『スペイン語の基礎』（一九七二年一〇月、研数書院、現同書名で東洋書店より発行）
- 『スペイン語の表現』（一九七三年一〇月、研数書院、現同書名で東洋書店より発行）
- 『旅行者のためのスペイン語ハンドブック』（一九七六年四月、日本放送出版協会）
- 『カリブの国々』（一九七六年一月、日本工業新聞社）
- 『スペイン語コーヒーブレイク』（一九七七年八月、日本放送出版協会）
- 『スペイン語 続コーヒーブレイク』（一九七八年、日本放送出版協会）
- 『中米の奇跡 コスタリカ』（一九八四年一月、東洋書店）
- 『スペイン語―基礎から応用まで』（一九八四年二月、東洋書店）
- 『スペイン語会話110番Ⅱスペイン旅行編』（一九八八年二月、旺文社）
- 『スペイン語会話110番Ⅱ日常生活編』（一九八九年五月、旺文社）
- 『中米Ⅱ干渉と分断の軌跡』（一九九〇年四月、東洋書店）
- 『スペイン語旅行コース』（一九九二年四月、日本能率協会）

『応用スペイン語文法』（一九九三年三月、東洋書店）

『S. S. 初級スペイン語』（一九九四年九月、リンガフォン・ジャパン社）

『神様に国境はない スペイン語教師、中南米をゆく』（一九九四年一〇月、東洋書店）

『対訳スペイン語詳解』（一九九五年八月、東洋書店）

『スペイン語とつきあう本』（一九九八年八月、東洋書店）

『会話で覚えるスペイン語999』（一九九九年六月、東洋書店）

『60歳からのスペイン語入門』（二〇〇一年二月、三修社）

『エクアドル—ガラパゴス・ノグチ・バナマ帽の国—』（二〇〇五年九月、東洋書店）

編著・共著

共著 『エクアドルの言語地誌、エクアドルの自然と文化』（早稲田大学エクアドルアンデス遠征隊報告書E L E C U A D O R R に所

収、一九六三年二月、右記遠征隊事務局）

共著 『ESPANOL UNIVERSAL』（テキスト、共著者ファン・ナバロ、一九七三年三月、いつみプロ）

共著 『アンデス諸国』（図詳ガッケン・エリア教科事典「第四巻、「世界地理」、一九七四年五月）

編著 『中央アメリカ』『カリブ海諸国』『コロンビア・エクアドル』（朝日百科「世界地理」一一二、一一三、一一五号、一九八五年

二月、朝日新聞事典編集室）

共著 『日英対照のスペイン語会話』（「マルチリンガルシリーズ」共著者 花本金吾、一九九〇年一月、旺文社）

共著 『ラテンアメリカ都市と社会』（国本伊代／乗浩子共編、第八章「ラテンアメリカ都市の魅力をさぐる」、一九九一年九月、新評

論)

共著『8か国語対照 ネーミング辞典』(一九九一年一月、学習研究社)

編著『スペイン語 基礎と演習』(測上英二、ハメス・ディアス、大岩功と共著の語学教材、一九九七年三月、教材マルコ社)

共編著『スペインの社会』(共編者 原輝史、一九九八年五月、早稲田大学出版社)

共著『Aprender, leer y escribir』読む、書く、話す スペイン語(共著者 大岩功、一九九九年三月、教材マルコ社)

多項目執筆参加

『世界の文化地理』(第六巻「アメリカ」のうちの一〇か国、一九七三年一〇月、講談社)

『現代世界百科事典』(国名、地名、人名、歴史、文化等五八項目、全三巻、一九七四年四月、講談社)

『図詳ガッケン・エリア事典』(第四巻「世界地理」のうち「アンデス諸国」、一九七六年五月、学習研究社)

『グラント現代百科事典』(「世界地図(スペイン、ポルトガル、ラテンアメリカ地名デジタル検索)」、一九七八年五月、学習研究社)

『カラー百科 目でみる世界の国々164』(第一二巻「中部アメリカ」のうち七か国執筆、一九七九年一〇月、TBSブリタニカ)

『平凡社 大百科事典』(中米およびギアナ三国、中南米社会に関する項目、一九八五年、平凡社)

『小学館 日本大百科全書』(人名、事件名八項目、第四巻一九八五年六月、小学館)

『ラテンアメリカを知る事典』(平凡社 大百科事典)の関連項目を補充転載、一九八七年七月、平凡社)

『世界の料理・メニュー辞典』(中央アメリカ、カリブ海地域、南アメリカ)、二〇〇一年四月、学習研究社)

『コスタリカを学ぶ』(コスタリカ共和国政府観光局編、二〇〇四年一〇月、コスタリカ共和国政府観光局東京事務所)

監修、改訂、書評、翻訳

- 改訂 『スペイン語常用動詞作文小辞典』（原著者 岡田峻の初版一九五五年五月を改訂し一九八一年一月改訂版発行、北星堂）
- 監修 『地球の歩き方37―南米』（一九八八年二月、ダイアモンド社）
- 翻訳 エドゥアルド・アルバラン著『ガウデイのバルク・グエル』（カタラン語からの翻訳、一九八九年一〇月、東洋書店）
- 書評 ピーター・マシーセン著／斎藤数衛訳『神の庭に遊びて』（月刊現代）（私の読書ノート）五月号、一九九二年一二月、講談社）
- 通訳・翻訳 ジョルデイ・パジェス「カタラン語の諸問題」（公開講座―ロマンス語）一九八九年一〇月、早稲田大学語学教育研究所主催）のカタラン語による発表を通訳（翻訳は『公開講座―ロマンス語』一九九二年三月、早稲田大学語学教育研究所 収録）
- 書評 松下冽著『現代ラテンアメリカの政治と社会』（週間読書人）一九九三年六月七日）
- 序文 「日系人証明―南米移民、日本への出稼ぎの構図」（移住の意味―南米・日本の格差）一九九五年四月、新評論）
- 翻訳 ラモン・セルタ・マソ著「多言語国家と言語の共存」（『スペインの社会』一九九八年五月、早稲田大学出版部）
- 序文 「日本語版出版に寄せて」（ハイメ・エイサギルレン著／山本雅俊訳『チリの歴史』一九九八年六月、新評論）
- 書評 シドニー・W・ミンツ著／藤本和子編訳『（聞き書）アフリカン・アメリカン文化の誕生』、二〇〇〇年二月、岩波書店（『人文論集』二一九号、二〇〇一年二月、早稲田大学法学部）
- 監修 『ラテンアメリカの書棚から』（山本和彦著、地域諸国関係書誌、二〇〇二年四月、ラテンアメリカクラブ）
- 書評 Mary A Renda, *Taking Haiti: Military Occupation and the Culture of U.S. Imperialism, 1915-1940*. 『アジア経済』第四六卷、第三号、二〇〇五年三月、アジア経済研究所）

論 文

- 「メキシコの石油収用と補償」(修士論文、一九六三年三月提出)
- 「メキシコ人と死」(『スペイン図書』一四号、一九六六年一月、イタリア書房)
- 「イスパノアメリカにおけるVoseoの消長」(『スペイン図書』一五号、一九六七年一〇月、イタリア書房)
- 「インディオ社会と現代ラテン・アメリカ」(『人文論集』六号、一九六九年二月、早稲田大学法学部)
- 「エクアドル国立セントラル大学の地位―大学改革」(『スペイン図書』一七号、特集「ラテン・アメリカにおける大学改革と学生問題」所収、一九六九年二月、イタリア書房)
- 「ラテンアメリカにおける資源と占有の価値観」(『海外事情』一月号、一九六九年一月、拓殖大学海外事情研究所)
- 「植民地時代におけるエクアドル インディオ」(『人文論集』八号、一九七二年二月、早稲田大学法学部)
- 「南アメリカにおける公証制度の消長」(『公証法学』二号、一九七三年五月、日本公証法学会)
- 「パナマ問題の推移と現状」(『国際問題』一六〇号、一九七三年七月、日本国際問題研究所)
- 「崩壊した『社会主義の実験』」(『月刊世界政経』二月号、一九七三年二月、世界政治経済研究所)
- 「パナマ・ナシヨナリズムの側面―一九二〇―三〇年代の大衆運動をめぐって―」(『ラテンアメリカのナシヨナリズム』所収、一九七七年三月、アジア経済研究所)
- 「標準」スペイン語と私」(『人文論集』一四号、一九七七年三月、早稲田大学法学部)
- 「米州スペイン語論の前提」(『南欧文化』八号、一九八二年一月、文流榭)
- 「米州スペイン語の変容過程」(『立教大学ラテンアメリカ研究所報』創立二〇周年記念号、一九八四年一月、立教大学)
- 「言語変容からみたプエルトリコ人のアイデンティティ」(『アジア経済』二五卷二二号、一九八四年二月、アジア経済研究所)

“El peligro reaccionario—El emperador nipón no es el jefe del Estado” (TEMAS DE NUESTRA ÉPOCA), *EL PAÍS*, AÑO II, NÚMERO 46, Jueves 29 de septiembre 1988, Madrid, España)

「運河ナシヨナリズムの背後」〔『海外事情』七・八月号、一九八九年八月、拓殖大学海外事情研究所〕

「最近のキューバ外交」〔『海外事情』二月号、一九九二年二月、拓殖大学海外事情研究所〕

「ラテンアメリカのスペイン語」および「バビアメント語の派生をめぐって」〔『公開講座—ロマンス語』、一九九二年三月、早稲田大学言語学教育研究所〕

「共通テキスト・共通テスト—スペイン語科目の場合—」〔『人文論集』第三五号、一九九七年二月、早稲田大学法学部〕

小 論

「新大陸のスペイン語」〔『月刊スペイン語』、一九六六年四月号—六二年一月号、大学書林〕

「Crioillo, Gringo, Yanqui—中南米の合言葉」〔『LIT NEWS』第三二・三三号、一九六六年九月—六七年三月、早稲田大学言語学教育研究所〕

「エクアドル」〔『朝日ジャーナル』ヘスチューデント・パワー八、一九六八年、八月二一日号、朝日新聞社〕

「太陽と月になった子どもたち」〔『中一英語フレンド』〈世界民話シリーズ・メキシコ〉、一〇月号、一九六八年一〇月、フレンド社〕

「太陽の国の学園運動」〔『現代の日本』二月号、一九六九年一月、IN通信社〕

「氷陸の国パタゴニア」〔『南アメリカ』世界の旅二〇、一九六九年四月、河出書房新社〕

「地の果てパタゴニア」〔『文化誌 世界の国』第二卷—ラテンアメリカⅡ、一九七五年四月、講談社〕

「緑の草原と緑の石 コロンビア」〔『WORLD』二〇、第四卷四号、一九七六年七月、ティビエス・ブリタニカ〕

- 「私のスペイン語講座」(『総合教育技術』一九七八年五月号、小学館)
- 「メキシコ教育寸描」(『総合教育技術』一九八〇年二月号、小学館)
- 「ハボンとメヒコー日本とメキシコ 旅の比較文化」(『バスポート』〈特集〉メキシコ、一九八〇年二月号、日本交通公社)
- 「スペイン語の政治的対立—地方自治体と民主化をめぐる—」(『読売新聞』、一九八一年二月二七日(金曜日) 夕刊、読売新聞社)
- 「シエスタ—偉大なる午後」(『月刊百科』二二九号、特集〈眠る〉、一九八二年九月、平凡社)
- 「アンデス 標高四〇〇〇メートルの秋」(『Quark』一〇月号、一九八三年一〇月、旺文社)
- 「ラテンアメリカ音楽の全体像」および「旅行で聴いた音の風景」(『事典ラテンアメリカの音楽』、一九八四年四月、冬樹社)
- 「匂いの地理学」(野谷文昭／日敬介編『ラテンアメリカ文学案内』所収、一九八四年一月、冬樹社)
- 「スペイン語を通してみたラテンアメリカ」および「ツーリズム」(松本重治監修、加茂雄三編『ラテンアメリカハンドブック』、一九八五年一月、講談社)
- 「差別される大学の 新興外国語 —国際化めざすが国の姿勢に逆行—」(『読売新聞』、一九八六年五月八日(木曜日) 夕刊、読売新聞社)
- 「アミーゴと人脈」(『月刊百科』〈こむにたす〉、一八七号、一九八七年四月、平凡社)
- 「混血の行方」(『月刊百科』〈こむにたす〉、一八八号、一九八七年五月、平凡社)
- 「南米は寒い」(『月刊百科』〈こむにたす〉、一八九号、一九八七年六月、平凡社)
- 「帰国子女の大学入試に一考を—英語偏重をやめ異文化の理解度こそ—」(『朝日新聞』、一九八七年一月二六日(月曜日) 朝刊、朝日新聞社)
- 「民衆の選択—中米コスタリカの非武装中立」(『婦人の友』「平和思想の系譜17」、一九八八年五月、婦人の友社)

「ラテンアメリカの自然と文化」(世界の国シリーズ一九九〇年六月、講談社)

「ことばのフィールド・ノート」(『NHKラジオ・スペイン語講座』テキスト一〜三月号、一九九〇年一月、日本放送出版協会)

「小学館『西和中辞典』と白水社『現代スペイン語辞典』を検証する」(特別寄稿、『NHKラジオ・スペイン語講座』テキスト五月号、

一九九〇年五月、日本放送出版協会)

「パナマ運河建設の歴史」(『中学校 地理・社会研究』、一九九一年一・二月号、帝国書院)

「ペルー映画『豚と天国』」(『クロスロード』『作品の世界を行く』、一月号、一九九二年一月、『クロスロード編集室』)

「ラテン・アメリカのチステめぐり」(『ラテンアメリカ時報』一九九三年一〜四号、日本ラテンアメリカ協会)

「中米コスタリカの人権と環境」(『聖教新聞』一九九八年九月二四日(木曜日)〈七〉、聖教新聞社)

「軍隊を捨てた国・コスタリカ」(『シネ・フロント』三〇〇号、Vol.27 No.1、二〇〇〇年一月、シネ・フロント社)

「メキシコの先住民問題」(『地理・地図資料』「世界の諸民族⑦」、二〇〇〇年二月、帝国書院)

「コスタリカの今」(『歴史地理教育』、二〇〇〇年八月号、第六二二号、歴史教育社協議会)

座談・対談・口頭発表

対談 「外国語を学ぶ楽しみ」(『総合教育技術』〈日本語と日本文化〉、一九七九年一月号、小学館、およびドメニコ・ラガナ他著

『紅毛碧眼 日本語談義』第八章に収録、一九七九年七月一〇日、小学館)

座談 「国際化時代と外国語」(『人文論集』第二〇号 特集〈二十世紀精神の諸相〉司会、一九八二年、早稲田大学法学部)

座談 「早稲田大学創立一〇〇周年記念号特集号」座談会その2「語研に何を望むか」(『ILT NEWS』第七三号、一九八三年三

月、早稲田大学語学教育研究所)

口頭発表 「ラテンアメリカのスペイン語」および「パピアメント語の派生をめぐって」(『公開講座―ロマンス語』、一九八九年一〇月、早稲田大学語学教育研究所主催)

鼎談 「ペルー日本大使公邸人質事件をいま振り返って」(『早稲田学報』一九九七年九月号、早稲田大学校友会)